

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00691

研究課題名(和文) Aelfric's Grammarの11世紀写本間言語変異の研究

研究課題名(英文) A Study of Linguistic Variation among the Eleventh-Century Manuscripts of Aelfric's Grammar

研究代表者

市川 誠 (Ichikawa, Makoto)

東京理科大学・教養教育研究院北海道・長万部キャンパス教養部・准教授

研究者番号：60625747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、後期古英語期の説教集作家アルフリッチが書いた『文法』の現存する11世紀主要写本からの転写テキストに基づく写本毎のデータベースを構築することで、刊行本や電子コーパスでは伺い知ることのできない『文法』の写本間言語変異の様相を解明することを目的とした。本研究では(1) Gneuss(1997)が「南東部方言の綴りが多かれ少なかれ頻繁に現れる」写本と指摘する3つの写本の言語には Zupitza(1880)のテキストでは観察されない非標準的な言語要素が含まれること(2) 11世紀の主要写本に現れる3人称複数主格形には6つの語形があり、その頻度は写本によって異なることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、『文法』の現存する11世紀の主要写本のすべての言語を転写し、写本毎のデータベースを作成することで、刊行本の脚注や電子コーパスからは伺い知ることのできない11世紀の写本間言語変異の様相を明らかにしたことである。加えて、写本毎における言語項目の実際の生起数も明らかにすることができた。現在、英語史研究では、刊行本や刊行本に基づく電子コーパスを利用するのが通例である。写本の言語に直接参照することで、新たな言語事実を解明する余地が依然としてあることを示すことができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to examine the language of the eleventh-century manuscripts of Aelfric's Grammar, thus revealing the linguistic variation among the manuscripts which are inaccessible in existing printed editions and electronic corpora. This project reveals the following two facts: (1) Looking closely at the language of the three manuscripts which are known to contain south-eastern spellings, they include non-standard dialectal elements which are not observed in the edited text of Zupitza (1880). (2) A close examination of the eleventh-century manuscripts shows that there are six forms of the third person plural nominative and their frequency varies from manuscript to manuscript.

研究分野：英語史

キーワード：アルフリッチ 古英語 写本 方言 写字生 英語史 写本間言語変異

1. 研究開始当初の背景

英語史研究では、Early English Text Society (EETS) などの刊行本、また近年では、刊行本に基づく *Dictionary of Old English Web Corpus, Corpus of Middle English Prose and Verse* などの電子コーパスを利用するのが通例である。ひとたび、刊行本で使用する写本が選ばれると、その他の写本の言語情報は、顕著な変異形のみ刊行本の脚注に記録され、代名詞や屈折語尾のような本文解釈に関連の低い言語項目の変異形は脚注に記録されない傾向にある。しかし、Laing (1992) が指摘するように、同時代の異地域からの写本の比較は、方言間の音韻、形態、語彙、統語の違いを、また、異時代の写本の比較は、時代間の言語変化を明らかにする。刊行本やそれに基づく電子コーパスで基底写本とは異なる写本での言語項目の生起を調べることができない場合、写本間の言語変異を明らかにするためには、一次資料である写本に直接当たり、転写テキストに基づくデータベースを作成し、そのデータベースに基づいて調査するしか方法はない。

2. 研究の目的

後期古英語期を代表する散文作家アルフリッチが書いた作品の一つに『文法』(*Grammar*)がある。11世紀に製作された『文法』の現存する写本数は13である。断片写本を除く9つの主要写本の言語を読むと、一般的に屈折語尾と強勢母音の表記における標準化が特徴である後期ウエストサクソン (Late West Saxon) 方言に基づいた「古英語標準語」(Standard Old English)で書かれている。しかし、各写本の言語を詳細に検討すると、古英語標準語から仄かに垣間見える言語変異が少なからず観察される。確かに、刊行から144年経過した現在においても『文法』の唯一の刊行本である Zupitza (1880) では、脚注に数多くの言語変異を記録している。しかし、刊行本の p.50 の脚注で Harley 107 写本における接尾辞 *-nyss* の変異形 *-ness* を記録する際に “ich bemerke drgl. Varianten in zukunft nicht mehr” (Zupitza 1880: 50 footnote) と述べるように、Zupitza はすべての変異形を網羅的に記録しているわけではない。また、変異形の記録を写本毎で行っていないため、Zupitza の脚注を読む限り、写本単位での非標準的な語形の出現とその頻度は不明である。11世紀の写本で観察される非標準的な言語要素について、Campbell (1959) は、写本が製作された地域や場所が明らかな場合でも、特定の地域や場所の方言要素に帰することはできないと指摘する。しかし、11世紀に製作された『文法』の写本、特に、書き写された地域が知られている写本の言語変異を記録することで、それが地域特有の方言要素と断定することはできないにせよ、非標準的な語形の分布が写本単位で明らかとなる。また、同じ地域で書き写された他の写本でも同様に確認される非標準的な言語要素の存在を考慮に入れることで、『文法』の写本が書き写された地域に広く見られる共通の言語特徴が浮き彫りになると同時に、各地域での『文法』の言語の伝播、受容の仕方について新たな知見が得られることが期待される。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するために、インターネットとマイクロフィルムリーダーで閲覧可能な画像を利用し、『文法』の11世紀の主要写本9つの転写を実施した。研究期間に転写した写本は以下の通りである（当初の計画では、現地調査を実施する予定であった。2020年に発生した新型コロナウイルスの影響で、現地調査を実施できなかったことは非常に残念である）。

- (1) Cambridge, University Library, Hh.1.10
- (2) Cambridge, Corpus Christi College 449
- (3) Durham, Cathedral Library B.III.32
- (4) London, British Library, Cotton Faustina A.x
- (5) London, British Library, Cotton Julius A.ii
- (6) London, British Library, Harley 107
- (7) London, British Library, Harley 3271
- (8) London, British Library, Royal 15 B.xxii
- (9) Oxford, St. John's College 154

4 . 研究成果

本研究の成果は次の2つに分類できる。1つ目の成果は、Gneuss (1997:47-8) が「南東部方言の綴りが多かれ少なかれ頻りに現れる (with south-eastern spellings occurring more or less frequently) 写本と指摘する3つの写本、Harley 107 写本、Cotton Julius A.ii 写本、Durham, Cathedral Library B.III.32 写本に現れる方言要素を写本単位で明らかにしたことである。2つ目の成果は、11世紀の主要写本に現れる3人称複数主格代名詞に注目し、3人称複数主格代名詞には標準的な語形 *hi* と共に非標準的な語形 *hig*、*hy*、*hyg*、*heo*、*hyo* の6つの語形があり、その語形の現れ方は写本によって異なることを示したことである。

(1) Harley 107 写本に特徴的な言語変異

Harley 107 写本は11世紀半ばに製作された写本である (Ker 1957: 303; Doane 2007: 21)。この写本はケント方言地域、恐らくはカンタベリーで製作されたと想定される。市川 (2020) で、研究代表者は Harley 107 写本に特徴的な言語変異として、(1) 変則動詞 *beon* の3人称複数現在直説法の語形である *siondon* (2) 短母音 *a* + 鼻子音 *+i* ウムラウト (3) 形容詞 *lang* の男性単数主格形 *lagne* があることを指摘した。

(2) Julius A.ii 写本に特徴的な言語変異

Julius A.ii 写本は11世紀から12世紀にかけて製作された3つの異なる写本が17世紀に合冊されたものである。アルフリッチの『文法』は11世紀半ばに製作された2番目の写本 (ff.10r-135v) に含まれる。Gneuss (2001: 64) や Doane (2007: 17) が指摘するように、2番目の写本には、アルフリッチの『文法』と共にアルフリッチの『語彙』(Glossary) (ff.120r17-130v22) と『ラテン語動詞論』(Treatise on Latin Verbs) (ff.130r1-135v5) が収録されている。『文法』の基底写本である Oxford, St. John's College 154 写本とは異なり、Julius A.ii 写本はラテン語版序文、古英語版序文、音韻論の箇所が欠落しており、『文法』のテキストは Zupitza の刊行本6ページ4行目に対応する文字論の途中から始まる。市川 (2021) で、研究代表者は Julius A.ii 写本における南東部方言要素として (1) ウエストサクソン方言の *e* に対する *æ* (2) ウエストサクソン方言の *ea* に対する *æ* (3) ウエストサクソン方言の *y* に対する *e* (4) ウエストサクソン方言の *iel* に対する *e* (5) 無声摩擦音の有声化が観察されることを指摘した。

(3) Durham, Cathedral Library B.III.32 写本に特徴的な言語変異

Durham, Cathedral Library, B.III.32 写本は、ダラム大聖堂図書館に所蔵される 11 世紀前半に製作された写本であり、*Hymnal* (ff.1r-43r)、*Proverbs* (ff.43v-45v)、*Canticles* (ff.46r-55v) を収録する同時代の別の写本と合冊されている。写本上にあるさまざまな証拠から、合冊された 2 つの写本は共にカンタベリー (Canterbury) との結び付きが指摘されている (Ker 1957: 147; Keffee 2007: 59; Gameson 2010: 12, 47-48)。市川 (2022) で、研究代表者は Durham 写本の『文法』の言語は、古英語標準語を基盤としながらも、同写本前半部に収録されている *Hymnal* と *Canticles* と共通する南東部方言要素を少なからず含んでいることを明らかにした。具体的には、(1) 綴り *a* で表される短母音 *a* + 鼻子音 + *i* ウムラウト (2) ウエストサクソン方言の *y* に対する *e* (3) *e* から *y* への反転綴り (4) 二重母音 *ea* に対する綴り *e* と割れの欠如 (5) 口蓋子音の後の二重母音の欠如 (6) 無声摩擦音の有声化である。

南東部方言要素を含むとされる『文法』の 3 つの写本を調査した結果、南東部方言要素の現れ方は一様でなく、出現頻度は写本間で異なるということが確認された。例えば、綴り *æ* で表される短母音 *a* + 鼻子音 + *i* ウムラウトは、Harley 107 写本と Durham 写本で観察される一方、Junlis A.ii 写本では現れない。南東部方言に特徴的な *eo* の代わりに *io* の綴りは Harley 107 写本に数多くみられるが、Julius A.ii 写本や Durham 写本には現れない。子音について言えば、摩擦音 *f* から *v* への有声化は、Julius A.ii 写本と Durham 写本で観察されたが、その頻度は小さいものであった。

(4) 11 世紀の主要写本における 3 人称複数主格代名詞の語形

市川 (2024) で、研究代表者は、アルフリッチの『文法』の 11 世紀主要写本 9 つにおける 3 人称複数主格代名詞の語形の分布を調査した。調査の結果、9 つの写本には、標準的な語形 *hi* と共に現れる非標準的な語形 *hig*、*hy*、*hyg*、*heo*、*hyo* が現れることが分かった。前述のように、6 つの語形の現れ方は写本によって異なる。*Hi* は調査対象となるすべての写本で使用される。*Hig* は 7 つの写本で使用され、特に Cambridge, University Library, Hh.1.10 写本と Cambridge, Corpus Christi College 449 写本で高い頻度で現れる。また、*hy* は 5 つの写本での使用が確認された。その他の語形 *heo*、*hyg*、*hyo* の出現頻度は極めて小さいものである。

本研究で明らかにした非標準的な語形は、『文法』の写本が書き写された地域の方言要素を反映している可能性があるという点で興味深い。例えば、*heo* は南東部方言との結び付きが指摘される Durham 写本と Harley 107 写本のみで使用される。Cambridge, Corpus Christi College 449 写本で 1 例現れる *hyg* はハンプシャーのサジック (Southwick) 修道院との結び付きがある London, British Library, Cotton Vitellius A.xv 写本でも数多く現れる。また、カンタベリーとの結び付きが推定される Harley 107 写本に現れる *hyo* は、同じくカンタベリーで書かれた *Eadwine's Canterbury Psalter* で現れることが知られている。さらに、Cambridge, University Library, Hh.1.10 写本で高い頻度で現れる *hig* はエクセターを含むイングランド南西部地域で製作された写本に広く見られる語形である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 市川誠	4. 巻 54
2. 論文標題 アルフリッチの『文法』Durham Cathedral Library B.III.32写本の言語	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要（教養篇）	6. 最初と最後の頁 225-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田忍、市川誠	4. 巻 15
2. 論文標題 試訳 ウルフスタンの「邪悪な時代」についての説教	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京都市大学共通教育部紀要	6. 最初と最後の頁 145-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 市川 誠	4. 巻 53
2. 論文標題 アルフリッチの『文法』Julius A.ii写本の言語	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要（教養篇）	6. 最初と最後の頁 211-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田 忍、市川 誠	4. 巻 14
2. 論文標題 試訳 ウルフスタンの「大司教の職務に係わる」説教	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京都市大学共通教育部紀要	6. 最初と最後の頁 131-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Makoto Ichikawa	4. 巻 61
2. 論文標題 Simon Horobin, How English Became English: A Short History of a Global Language	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in English Literature: English Number	6. 最初と最後の頁 129 135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田忍、市川誠	4. 巻 13
2. 論文標題 試訳 ウルフスタンの「キリスト教信仰」説教(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京都市大学共通教育部紀要	6. 最初と最後の頁 107 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川 誠	4. 巻 -
2. 論文標題 アルフリッチの『文法』Harley 107写本の言語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中世英語英文学研究の多様性とその展望	6. 最初と最後の頁 76 90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川 誠	4. 巻 2
2. 論文標題 アルフリッチの『文法』11世紀写本間言語変異 -3人称複数主格代名詞を中心に-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京理科大学教養教育研究院紀要	6. 最初と最後の頁 13 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川 誠	4. 巻 38
2. 論文標題 Aaron J. Kleist, The Chronology and Canon of Aelfric of Eynsham (Anglo-Saxon Studies 37)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 39 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 市川 誠
2. 発表標題 古英語版『マリアの被昇天』におけるbeon/wesan + 現在分詞構文
3. 学会等名 英語史研究会第30回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市川 誠
2. 発表標題 古英語期の作者不詳の聖人伝におけるbeon/wesan + 現在分詞構文
3. 学会等名 第170回東京都立大学中世英語英文学研究会12月例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 菊池清明、岡本広毅	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 650
3. 書名 中世英語英文学研究の多様性とその展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap

<https://researchmap.jp/ichikawamakoto/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------